

九州派私記

山内重太郎



始めに

去る九月二十三日より十月十日まで、福岡市美術館に於いて。「九州派展」が同館主催で開かれた。

この展覧会は、1957年、福岡市を中心とする若い画家、彫刻家によって、既成観念を排し、最大限に美術の可能性を探求することを標榜して結成され、以後約十年間、福岡、東京でグループ展、読売アンデパンダン展、個展、詩人グループとの街頭展、詩画展等を発表の場とし、九州最初の前衛美術運動を展開したが、その終息より既に四半世紀を経過して、半ば伝説の霧に閉されかけた、九州派の実像を白日の下に晒し、その光と影を鮮明にして、今日的意義を探ろうとして企てられたものである。

筆者は1957年九州派は結成から59年晩秋、派の運動路線を廻る論争の結果、決別して、オチ・オサム、菊畑茂久馬両君と洞窟派（俣野衛氏命名、結成後一年して解散する）を結成するまで、2年余所属していたに過ぎないが、脱退後も旧主派の動向とその終息後は、元会員達の活動の状況に関心を持ち続けてきた。

今回、はからずも、本誌に紙幅を与えられたので、既に忘却の淵に没しかけている記憶をかき立て。九州派に関する記録しておきたい事のいくつかを、その前史をも含め、私事、私見を雑えて書き留める事にした。私記とした所以である。

（今回、福岡市美術館より、美術評論家、同館学芸員による評論、作品写真、年表、元会員の発言等が掲載された「九州派展図録」が刊行されたので付記しておきたい）